

論文執筆支援マニュアル

執筆 馬場 淳子、古賀 健太郎、菊池 美里

監修 川口 裕司

2009年

はじめに

卒業論文や修士論文のテーマを決めて、論文を執筆するというのは学生諸君にとっては大学4年間の総決算であるだけでなく、それまでに経験したことのない大変な作業である。確かに、高校までの教育において、一つの研究テーマを自ら見出し、それについて読者を納得させるような文章を書く訓練はほとんど行われていない。今日の社会では、書くという営みを通して読者に理解を求めるよりも、むしろマルチメディアや発表ツールを駆使して、聞き手に視覚的・聴覚的にインパクトを与えることのほうが必要性が高くなっているようにも思われる。しかしながら、それと同時に書くことの重要性は見直されるべきではないだろうか。自身の考えを時間をかけて醸成し、それを推敲を重ねながら文字として定着していくことは、私たちにとって最も重要な知的作業にほかならない。

昨年度、ある研究プロジェクトの中で、日本語で論文を書くための指南書がまとめられた。本書はそうした試みに啓発される中から生みだされた。長年来、学生諸君からそのつど質問を受けながら、個別に対応してきた内容を、大学院生諸君の協力を得て、ここに一つの読み物としてまとめることができた。

卒業論文や修士論文を執筆するとはどういうことなのか、なにをもとにして、どのように書けばよいのか等、実際的な利便性を考えた構成になっている。もちろん論文には個性が必要であり、本書の内容は雛型でも規則集でもない。取捨選択はすべて読者の判断に任されている。本書を参考にしながら、それぞれが自分なりの論文の書き方というものを見つけることができれば、私たちの想いは届けられたと言えるのだろう。

2009年7月30日

監修者として

川口 裕司

目次

ページ

はじめに	I
目次	II
1. 参考資料を探そう	
1. 1. 探す前の準備	1
1. 2. さまざまな資料形態	2
1. 3. 資料集めのいろいろな手段	2
1. 4. まとめ	14
2. 参考文献を作ろう	
2. 1. 参考文献とは何か	15
2. 2. 参考文献と注との違い	15
2. 3. 参考文献作成上の注意点	15
2. 4. 参考文献記述の基本的な形	16
2. 5. 著者名の配列	21
2. 6. 同一著者の文献を列挙する場合	23
2. 7. 仏語文献の記述サンプル	26
3. 論文を書いてみよう	
3. 1. 論文とは何か	31
3. 2. 論文執筆のためのスケジュール	32
3. 3. テーマの設定	33
3. 4. 論文の構成と体裁	34
3. 5. 引用の仕方	37
4. 分析ツール	
4. 1. AntConc	39
4. 2. Praat	40

1. 参考資料を探そう

研究したいテーマを見出したり、それをよりはっきりとさせるためには、参考となる資料を探すことが第一に必要となります。ここではその資料の探し方について紹介をしていきます。

1. 1. 探す前の準備

まず、何についての資料を探すのかを明らかにする必要があります。卒論の場合なら、自分のやりたいテーマがどういった分野/領域の（言語学なら統語論や語用論、あるいは社会言語学や翻訳理論など）、どういった事象（たとえば冠詞やクレオール化など）についてなのかということです。

ただ、最初からそういったことが分かっているということはむしろ珍しいといえるでしょう。フランス語学についてやりたいけれど、それ以外はまだ決まっていないという方には、以下の本を読んでみることをおすすめします。

テーマを決めかねている人におすすめの本－「フランス語学の諸問題」シリーズ

- ①「フランス語学の諸問題」（2001 第2版）東京外国語大学グループ《セメイオン》著，三修社.
- ②「フランス語を考える：フランス語学の諸問題2」（1998）著者・出版社同上.
- ③「フランス語を探る：フランス語学の諸問題3」（2005）著者・出版社同上.

このシリーズは東京外国語大学の先生方や、外語大にゆかりのある先生方が執筆された論文を集めた論集です。論文は分野ごとにまとめられていて、それぞれの長さは比較的短く、また、専門的知識をまだそれほど持っていない人にも理解できるようにしてあるので、フランス語学のさまざまな分野でどのような研究が成されているかを垣間見ることができるのが特長です。また、あとでまた取り上げますが、巻末に分野ごとの参考文献の一覧があり重宝します。そして、日本語で書かれた、フランス言語学についての数少ない入門書でもあります。何についてやりたいのか決まっていない方は一度読んでみるとよいでしょう。

1. 2. さまざまな資料形態

次に、資料にはいったいどんなものがあるのかについて知りましょう。主に以下にあげたようなタイプに分けられます。

さまざまな資料

I. 紙媒体

- ・一般図書：いわゆる「本」のことです。「フランス語学の諸問題」のような論集も図書館の分類上これに含まれます。
- ・学術雑誌：論文が掲載される雑誌です。月刊のものが多いようです。「Langage」「Langue Française」「フランス語学研究」などがあります。
- ・紀要：各大学の学部や学科、研究室などが発行している論集です。外大フランス語研究室では紀要「ふらんぼー」を出しています。
- ・その他、新聞や一般の雑誌、辞書など。

II. 紙以外の媒体

- ・電子資料：CD-ROM や映像音声資料のことです。
- ・マイクロフィルム：貴重資料や新聞記事などをフィルムに焼付けたもの。専用のリーダーを使って閲覧する。
- ・インターネット上の情報：最近は学術論文の本文へもアクセスできるようになってきています。
- ・その他、テレビやラジオ、コーパスのデータなど。

研究の領域によって使用する資料は変わってきますが、以降では一般的によく利用される、紙媒体とインターネットの情報の一部に絞って、その集め方を紹介します。

1. 3. 資料集めのいろいろな手段

自分の研究テーマが何なのか、探したい資料が何なのか把握できたら、次はどんな手段で資料を集められるかを知りましょう。以下にまとめた手段をそれぞれ見ていきます。

資料集めのための手段

1. OPAC・Webcat Plus を使って探す
2. 年鑑を使って探す
3. オンラインデータベースから探す
4. 先行研究論文の参考文献をたどる

1. 3. 1. OPAC・Webcat Plus を使って探す

OPAC は On-line Public Access Catalog の略で、図書館が所蔵している資料につい

て検索するシステムです。各図書館がそれぞれ有しています。一方 Webcat Plus は国立情報学研究所 (NII) の提供している、全国の図書館の蔵書情報を横断的に検索するシステムです (言ってみれば、全国版の OPAC です)。この2つを使うことで、探したい本がその図書館にあるのか、もしなければ、他の図書館にあるのかといったことが分かります。資料の獲得に直接結びつく手段です。以下にそれぞれの使い方を紹介します。

[使い方] ～外語大図書館 OPAC 編～

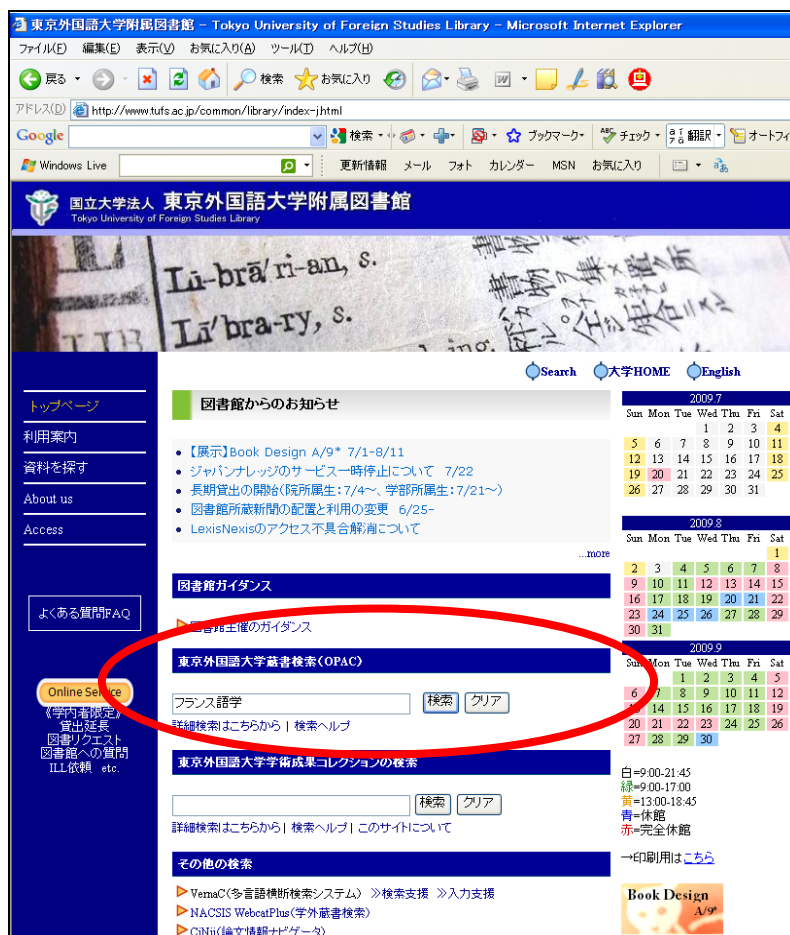
- ① 図書館ホームページにアクセスする

(<http://www.tufs.ac.jp/common/library/index-j.html>)

- ② トップページほぼ中央部にある「東京外国語大学蔵書検索 (OPAC)」のところに、キーワード (書名、著者名など) を入力する。

★試しに「フランス語学」と入力してみます (図1)

図1 東外大図書館トップページ



- ③ 検索結果表示。クリックして詳細が表示される。

★ 5件目の「フランス語学の諸問題」をクリックしてみます（図2）

図2 検索結果画面



④ 図書の詳細情報が表示される。一番下の「所蔵情報」で所在を確認。

★「フランス語学の諸問題」は4 F 閲覧室にあり、請求記号が N/a04/37/1 であることが分かります（図3 赤枠部分）¹

※ 学術雑誌の場合、「所蔵情報」欄に、何巻から何巻までを所蔵しているのかという情報も表示されます。必ずしも全巻揃っているわけではないので注意しましょう。

⑤ 所在と請求記号を頼りに資料を見つける（図書館内各フロアに貼ってある配架図を参照。配架図は④の画面の時（図3）に所在の部分（例：「4 F 閲覧室」）をクリックすることでも見ることができます）。

※ さらに絞り込んで検索したい場合→画面左側の「詳細検索」をクリック（図3 ピンクの円で示した所）。書名・著者名・発行年など複数の情報の入力による検索ができます。

※ 他の図書館にもあるか知りたい場合→右側の「Webcat Plus 検索」、「ICU 検索」のボタンをクリックすれば（図3 黄色の円で示した所）、その本に関する、Webcat Plus または ICU 図書館の OPAC のページにジャンプできます。すぐに

¹ もしその本が貸出中であれば、所在の欄にそのように表示されます。

その本を見てみたいが貸出中ですぐに手に入らない場合に見てみるとよいでしょう（Webcat Plus の使い方には後ほど触れます。ICU 図書館の OPAC は外大のものとはあまり変わりません）。

図3 図書詳細情報

The screenshot shows the OPAC interface for the University of International Studies (ICU). The browser window title is "opac - 総合目録データベース WWW 検索サービス - Microsoft Internet Explorer". The address bar shows "http://www-lib.tufs.ac.jp/cgi-bin/opac/search.cgi".

The main content area displays "図書詳細情報" (Book Details) for a book titled "フランス語学の諸問題 / 東京外国語大学グループ セメイオン著". The details include:

- 資料種別: タイトル言語: 日本語 テキスト言語: 日本語
- タイトル/責任表示: フランス語学の諸問題 / 東京外国語大学グループ セメイオン著
- タイトルのヨミ: フランスゴガクノショモンダイ
- 出版事項: 東京: 三修社
- 形態: 冊; 22cm
- 巻冊次: [1]
- ISBN: 4384054106([1])
- 注記: 子書誌あり。1のページ数 vii, 325p
- 著者標目形: [東京外国語大学グループ セメイオン | ウィキョウ ガイコク タイガク グループ セメイオン <DA00730819>](#)
- 分類: NDC8 850.1, NDLC KR43
- 件名: NDLSH フランス語(フランス語)L
- NCID: BN00673266

At the bottom of the details section, there are two search buttons circled in yellow:

- Webcat Plus 検索
- ICU 検索

The bottom section of the screenshot shows a "子書誌一覧" (Sub-bibliography list) and a "所蔵情報" (Holdings information) table. The holdings table is circled in red and contains the following data:

所在	巻冊次	請求記号	図書ID
4F閲覧室	[1]	NA04/37/1	0000087586
4F閲覧室	[1]	NA04/37/1-I	0000151586
4F閲覧室	[1]	NA04/37/17	0000140595

注意: OPAC で検索できる所蔵資料は全てではありません! OPAC に未登録のものもあるのが事実です。探している資料が OPAC で見つけられなかった時 (特にその資料が比較的古いものの場合) には、次の2つの手段が考えられます:

- ・ 目録から探す

目録は OPAC の紙版とでもいえるでしょうか。外大図書館 2 階にあります。それぞれの図書の情報（タイトル・著者名・請求記号 等）がカードに記載されており、それらがアルファベット順に引き出しに小分けされ整理されています。タイトルや著者名などから調べることができます。

- ・ Webcat Plus で探す

目録で探しても見つからなかった場合は、他大や諸機関の図書館にそれがあつかどうかを Webcat Plus を使って検索してみましょう。

【使い方】 ～Webcat Plus 編～

基本的には OPAC と同じです。

① Webcat Plus のホームページにアクセスする。 (<http://webcatplus.nii.ac.jp/>)

→外大図書館ホームページトップの「その他の検索」の所にも Webcat へのリンクがはってあります。

② 「一致検索」(緑色の方)を選び、タイトル・著者名・出版者・出版年・キーワード(タイトルに限らず割となんでも)を入力し「検索」する²。もちろんすべて埋める必要なし。

★ 試しに「キーワード」欄に「フランス語学」と入力してみます(図4)

③ 検索結果表示。クリックして詳細が表示される。

★ 「フランス語学の諸問題」を探してクリックしてみます

④ 図書の詳細情報が表示される。

⑤ 「所蔵図書館○館」をクリックしてその図書を所蔵している図書館の一覧を見る。

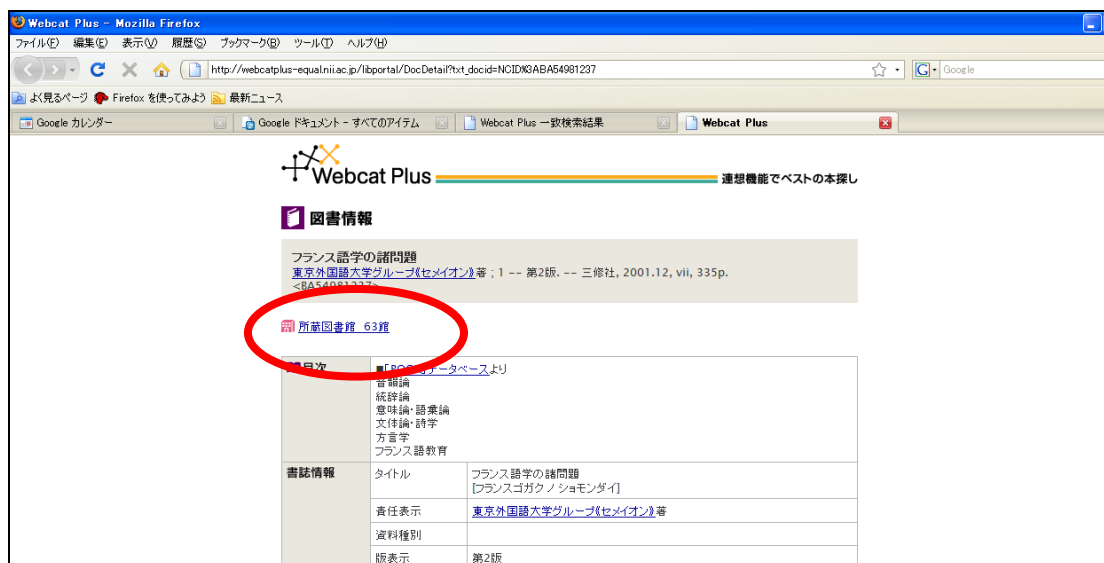
★ 「フランス語学の諸問題」を所蔵しているのは63館です。(図5)

² Webcat Plus には「連想検索」と「一致検索」の2つの検索方法があります。連想検索は関連する他の資料も知りたい場合、一致検索は探したい資料が明確な場合といったふうに使分けができるようになっているのです。ただ、実際に使用価値が高いのは後者の一致検索の方であるといえます。全国の図書館の資料から検索するため、連想検索だと検索結果が膨大になりがちだからです(たとえば「フランス語学」でだと1万件以上ヒットしてしまいます)。ここではひとまず一致検索の使い方をみていくことにします。

図4 Webcat Plus 一致検索画面



図5 図書詳細情報



⑥所蔵図書館のそれぞれをクリックすると、その図書館の利用に関する情報（図書館のホームページアドレス、開館時間、外部の者の入館について等）が表示される。

★ために「京外大」をクリックしてみます（京外大は京都外国語大学のことで、因みにTUFsは「東外大」と表示されます）（図6・図7）

⑦それ以降の情報（その図書館のどのあたりにその資料があるのか、貸出中か、など）については Webcat Plus では調べられないため、各図書館のホームページに行き、その図書

館の OPAC を使って調べる必要がある。OPAC の使い方はどこの図書館もそれほど変わらない。

★京都外大図書館のホームページアドレスをクリックして京外大図書館のページ、そして OPAC へ（図7 赤い円）。

図6 所蔵図書館一覧



図7 京都外国語大学図書館利用案内



⑧もしその図書館に行きたい場合には紹介状などが必要になることがある³。また文献複写や相互貸借（ILL）の制度もある。手続きの方法など詳しくは外大図書館ホームページの「資料を探す」→「学外の資料を探す・取り寄せる」のページを参照（<http://www.tufs.ac.jp/common/library/index3-j.html>）。

1. 3. 2. 年鑑を使って探す

年鑑(bibliographie)とは、1年間に発表された論文についての情報をリストした書物です。たいいていの場合一年毎に発行されています。フランス語学の領域では以下の2つの年鑑があります：

- ・ 「Bibliographie Linguistique」
世界中で発表された言語学に関する論文についての年鑑です。今のところ1939年から2004年までが図書館にあります（2009年7月現在）。トピック（古仏語・音声学・統語論など）による分類と、研究対象言語による分類があります（図8：トピックによる分類）。
- ・ 「フランス語フランス文学研究文献要覧」
日本における1945年以降のフランス言語学・フランス文学についての年鑑です。だいたい2003/2004のように一冊で2年分のデータがリストされています。書名・著者名・掲載書誌名から調べることができます（図9：書名による索引）

これらの年鑑は外大図書館に入っています。2階の入りて一番奥の本棚の並び、請求記号は、Bibliographie Linguistique→N/831/2、フランス語フランス文学研究文献要覧→A/9N-3/7aです。どちらも「禁持出」のシールが貼ってあるので、借りることはできません。注意して下さい。

年鑑を調べて、閲覧してみたいものが見つかったら、OPACやWebcat Plus、あるいは次に紹介するいろいろなオンラインデータベースを使って検索をして見ましょう。

³ 協定を結んでいる大学図書館は紹介状不要。協定を結んでいる図書館については<http://www.tufs.ac.jp/common/library/service/tokutei-j.html#icu>を参照。

図8 Bibliographie Linguistique de l'année 2004 p.333 より

MIDDLE FRENCH

4890-4900

11.3.1. Occitan (Provençal) — Occitan (provençal)

- Brun-Trigaud, Guylainé: Le breton: un éclairage sur l'histoire des parlers gallo-romans? — 5851.
- Coyos, Jean-Baptiste: *Politique linguistique* ... — 12332.

4890 Hagman, Roy S.: The historical reconstruction of cognitive models: *amor* in Bernard de Ventadorn. — *JALCIS* 30, 2003 (2004), 105-115.

- Maurer-Laussegger, Herta: The diversity of languages in the Alpine-Adriatic region. I. — 2858.
- Tavani, Giuseppe: O galego de Raimbaut de Vaqueiras e o provençal de Aires Nunez. — 4538.

11.3.2. French — Français

- Barta, Péter I.: Problems encountered while revising the proverb lore in a general bilingual dictionary. — 13285.
- Bauer, Brigitte L. M.: *Archaic syntax in Indo-European* ... — 3299.

4891 Bochnakowa, Anna: Un détail sur le numéral *quatre-vingts*. — [613], 49-52.

- Brun-Trigaud, Guylainé: Le breton: un éclairage sur l'histoire des parlers gallo-romans? — 5851.
- *Échanges* ... — 134.

4892 Huchon, Mireille: *Histoire de la langue française*. — Paris: Librairie Générale Française, 2002. — 315 p. — (Le Livre de poche. Références; 542) | *SaS* 65/4, 2004, 309-312 Jan Hols.

- Komarovs'ka, Vanda: Zistavlenija hramatyčnych norm anhljjs'koji ta francuz'koji movy v hramatyčy Ž. Pal'shrava. — 728.
- Marzys, Zygmunt: *La variation et la norme* ... — 4883.

4893 Štichauer, Jaroslav: La dérivation suffixale en diachronie: exemple de *tendresse / tendreté*. — [134], 247-252.

11.3.2.1. Old French — Ancien français

4894 Katalymaitė, Rūta Elžbieta: Types structuraux de l'apposition en ancien français. — *Kalbotyra* 53/3, 2003, 41-45.

4895 Mikalkevičienė, Irina: La synonymie dans quelques branches du Roman de Renard. — *Kalbotyra* 52/3, 2003, 86-93 | *Lith. ab.*

4896 Pešek, Ondřej: L'emprunt lexical et les champs linguistiques. — [134], 205-212.

4897 Sayers, William: Lexical and literary evidence for medieval trade in precious goods: Old French *rohāl*, *roal*, Middle English *rouel* "walrus (and narwhal?) ivory". — *NOWELE* 44, 2004, 101-119.

- Schrijver, Peter C. H.: The rise and fall of British Latin ... — 5801.

4898 Völker, Harald: *Skripta und Variation* ... — Tübingen, 2003 | *BL* 2003, 4880 | *RomGG* 10/1, 2004, 116-117 Johannes Kramer.

11.3.2.2. Middle French — Moyen français

4899 Carlier, Anne: Sur les premiers stades de développement de l'article partitif. — *COLLA* 18, 2004, 117-147.

4900 Tyhus, Piotr: Note sur l'ancien adjectif *souldre*. — *RomC* 4, 2004, 280-281.

333

図9 フランス語フランス文学研究文献要覧 2003/2004 p. 153 より

フランス語の共時的研究

フランス語学

1790 石井彩子 ○フランス語の語頭における「阻音+流音」の連続に関するエレメント理論による考察: フランス研究(北海道大学フランス語フランス文学研究会) 5 2004 p49-68

1791 大岩昌子 ○日本語およびフランス語の含有周波数成分の比較検討: 名古屋外国語大学外国語学部紀要(名古屋外国語大学) 27 2004.2 p73-83

1792 角杉真一著 ○m-, in-に始まるフランス語の発音について (『周辺』[TLLMF]合併号 森本英夫先生古稀記念 シメール社 2004.5 196p) p75-78

【紹介】

1793 ○フランス語の発音について (シャンソン・フランセーズ フランス愛唱歌集 フレミ楽譜出版社 2003.11 110p) p108

音韻論・形態論

【研究】

1794 石丸久美子 ○フランス出版物(新聞・雑誌)における職業・役職名詞の女性化についての考察: 関西フランス語フランス文学(青山社) 第7号 2001.3 p75-76

1795 Kazumi Nakao ○Une reflexion sur la construction (nom+nom): Pourquoi dit-on le serpent boa, mais pas le chien caniche? : Etudes de langue et littérature françaises (白水社) 82 2003 p220-230

1796 酒井智宏 ○Les constructions avec NP (XP) en français [酒井智宏] 2003 1冊(博士論文(学術)東京大学 甲第18641号 平成15年10月23日)

1797 藤村逸子 ○フランス語の文法的「性」—職業名詞の女性化をめぐる(誌上シンポジウム 言語とジェンダー: フランス語と日本語の場合): フランス語学研究(日本フランス語学会) 37 2003 p82-84

1798 松田孝江 ○フランス語における職業名の女性化について: コミュニケーション文化論集(夫妻女子大学コミュニケーション文化学会) 2 2004.3 p21-33

統語論

【研究】

1799 平塚徹 ○フランス語の疑問文における文体的倒置について: 京都大学言語学研究所(京都大学大学院文学研究科言語学研究室) 20 2001 p87-117

1800 山本幸一 ○メトニミーの機能—Langackerの認知文法の視点から: 愛知淑徳大学論集(愛知淑徳大学) 第26号 2001.3 p51-67

1801 平嶋一美 ○フランス語動詞時制学習上の困難に関する言語学的考察—複合過去形の学習について: フランス文学論集(九州フランス文学会) 第36号 2001.10 p33-45

☆ 「フランス語学の諸問題」シリーズを活用しよう ☆

始めの方でも触れましたが、「フランス語学の諸問題」シリーズの各巻末には、基本文献の案内リストが付いています。これの利用価値も高いのでここで紹介しておきます。このリストにはソシュールやマルチネなどの代表的な言語学者の主な文献や、各トピックの重要な研究が国内外問わずまとめられています。上に挙げた年鑑だと、1990年なら1990年の、91年のなら91年のといったように、発行年毎に引きなおす必要があって少し面倒ですが、「フランス語学の諸問題」シリーズのこのリストではそうした手間がなく、しかも一般図書で借りることが可能なため、基本的な文献を調べる手始めとしてはとても重宝します。ぜひ一度見てみるとよいでしょう。

1. 3. 3. オンラインデータベースから探す

オンラインデータベースとは先ほど紹介した年鑑に掲載されているような文献情報や、論文本文ファイルへのリンクなどをインターネット上で検索できるようにまとめたものです。外大生が利用できるデータベースとして以下のものがあります。これらはすべて外大図書館ホームページの「資料を探す」→「論文を探す」のところからジャンプできるようになっています (<http://www.tufs.ac.jp/common/library/index3-j.html>)。

外大生が利用できるデータベース(2009年7月現在)(図書館HPより引用)

1. CiNii (NII 論文情報ナビゲータ) <http://ci.nii.ac.jp/>
対象：国内発行雑誌の掲載論文 ※本文へのアクセスは原則学内からのみ可能
2. NDL-OPAC 雑誌記事索引 <http://opac.ndl.go.jp/>
対象：雑誌記事索引採録誌参照
3. 東京外国語大学学術成果コレクション (リポジトリ)
<http://repository.tufs.ac.jp/doc/>
対象：本学紀要・博士論文
4. JAIRO (学術機関リポジトリポータル) <http://jairo.nii.ac.jp/>
対象：機関リポジトリ一覧に掲載された各機関リポジトリ搭載資料

5. オンラインジャーナル・DB

<http://www.tufs.ac.jp/common/library/guide/list/online.html>

対象：国外発行雑誌の掲載論文（主に英語）

※一部を除き、原則学内からのみアクセス可能

・Google または Google Scholar <http://scholar.google.co.jp/>

対象：オンラインで検索／閲覧可能な論文

ここではこの中から、国立情報学研究所（NII）が提供している CiNii（サイニィ）を使ってみることにします。

[使い方] ～CiNii 編～

- ① 図書館ホームページ等から CiNii のページへ。
- ② キーワードを入力して「論文検索」をクリック。「CiNii に本文あり」や「CiNii に本文あり、または連携サービスへのリンクあり」を選んで検索すれば、本文が見られるもののみヒットすることができます。
★試しに「フランス語 副詞」と入力し、「CiNii に本文あり、または連携サービスへのリンクあり」にチェックをつけて検索してみます。
- ③ 検索結果表示。クリックで詳細表示。
★6件ヒットしました。「フランス語の副詞と独立文」をクリックしてみます
(図 10 赤い円)
- ④ 文献詳細情報表示。「本文を読む/探す」欄にあるボタンで、本文を閲覧したり、外大図書館の OPAC や Webcut Plus にジャンプして所蔵情報を確認することができる (図 11)
※ OPAC のようにタイトル・著者名・発行年等を指定する詳細検索もちろん可能です。

他のデータベースの使い方も基本的には同じです。学内アクセスに限定されているものは外大がデータベース提供元と契約をしているからなので、使わなかったらもったいないですね。外大生である間に存分に活用したいものです。

図 10 CiNii 検索結果

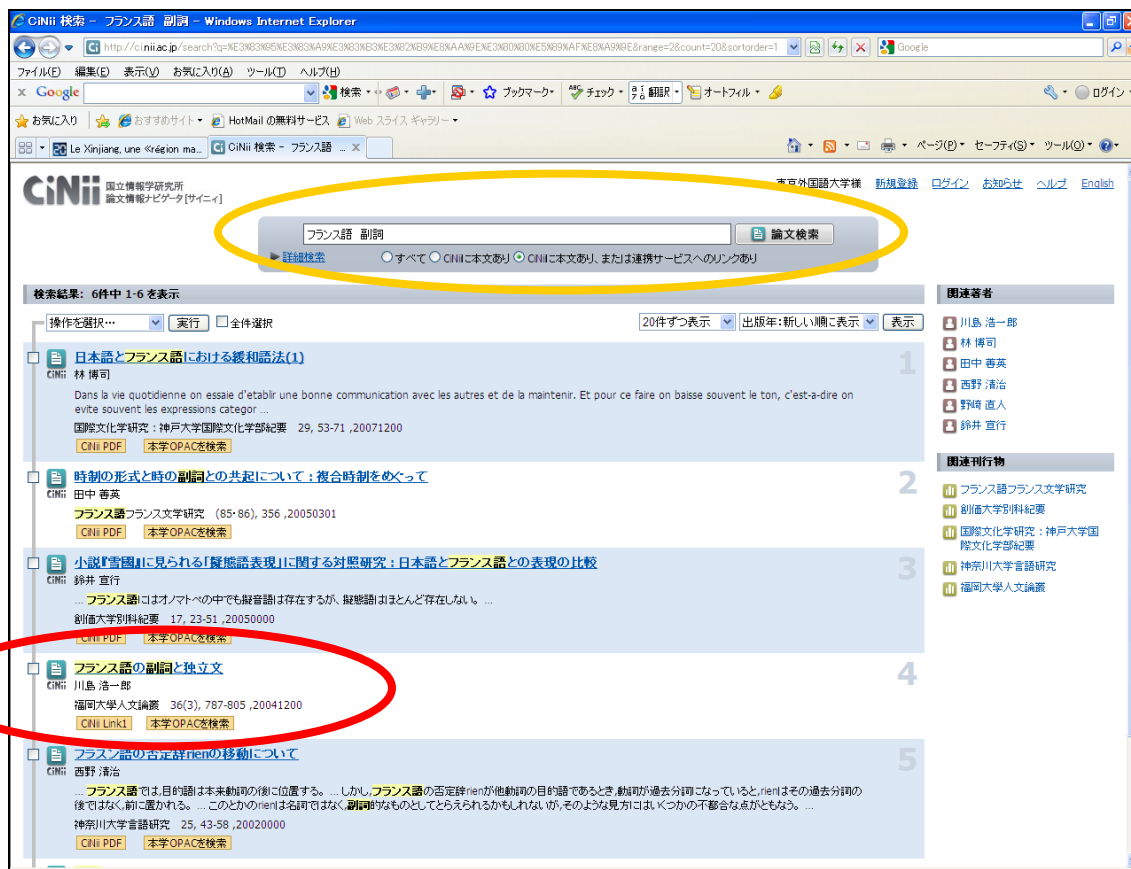


図 11 文献詳細情報



1. 3. 4. 先行研究論文の参考文献をたどる

参考資料がいくつか集まった状態の場合に、もうひとつ有効な手段がこの「参考文献をたどる」です。つまり、集めた文献の最後にある参考文献（référence）のリストから、自分にも参考になりそうなものを見つけ、それを OPAC や Webcat Plus で探して集めていくという方法です。自分の研究の参考となる資料の筆者が参考にした文献なわけですから、関係ないということはないはずです。特にその筆者が文献の中で、同分野の先行研究として紹介しているものはぜひ参考にするべきでしょう。さらに、同じ分野のいくつかの文献を見ていくと、必ず引用される先行研究があることに気づくはずですが、たいていの場合それは、その分野の第一人者の研究だったり、画期的発見・成果をもたらした研究です。それは絶対に外せません！古い文献だと手に入りにくい場合もありますが、探してみる価値は大きいといえます。

1. 4. まとめ

以上参考資料を集める主な手段と流れについて紹介してきました。まずは自分のテーマを、さまざまな研究を見ながらはっきりとさせることが重要です。ここであげた手段は一部に過ぎませんが、これらのさまざまな手段をうまく使いこなして、資料を効率よく集められるようになりましょう。

☆ ICU 図書館を活用してみよう ☆

2009 年 4 月から、ICU（国際基督教大学）図書館との相互利用制度がスタートしました。これによって外大生は、ICU 図書館への入館だけでなく、図書を借りることもできるようになりました。

ICU 図書館は、言語学や文学だけでなく、社会学や教育学、生物学、歴史学など、さまざまな学問領域の蔵書があることが特徴です。英語・日本語以外の言語に関する蔵書は外大図書館ほどではありませんが、言語学の中でもより理論的な分野や、言語教育関係の蔵書は充実しています。外大図書館で貸出中の本でも、ICU ではまだ借りられてない、といったことも少なくないですし、1 ヶ月借りられるので貸し出し延長のために何度も通う必要もありません。たまには違う図書館で勉強してみる、というのもよいかもしれませんね。ICU までは外大から自転車で 10～15 分で行けます。

（貸出期間 1 ヶ月、3 冊まで。延滞は 1 冊 10 円／日、初来館→学生証を入館時に提示。ICU 図書館利用カードを取得後は外大と同じ要領で入館・貸出手続が可能）

ICU 図書館ホームページ： <http://www-lib.icu.ac.jp/>

ICU キャンパスマップ： <http://www.icu.ac.jp/info/facilities.html>

2. 参考文献を作ろう

2. 1. 参考文献とは⁴

参考文献(文献表)とは、利用した文献や資料に関する全ての情報の一覧表のことです。

これを論文の末尾につけると、脚注や後注の注欄をごく簡単な略記で済ませる事が出来ます。例えば、「中村(1988)、12 ページ。」「[文献表]123 番、34 ページ。」といったように、参考文献(文献表)のどの文献か指示しさえすればよいのです。よって、注や引用の多い論文では、参考文献(文献表)をつけたほうがはるかに便利です。卒業論文では参考文献の表を作りましょう。

2. 2. 参考文献の記述と注の記述との違い⁵

参考文献を記述する目的は、利用者ないし次代の研究者に対して関係文献・資料の基本的な書誌的事項、すなわち著者名、文献・資料名・出版地、出版社、出版年などを知らせることである。その目的からすれば、ページ付けは重要な記述事項ではありません。

一方、注の目的は、①読者・利用者に対して図書・論文の著者がどの文献・資料を使用したかを知らせることと、②利用者に著者がどの個所を使用したかを知らせること、です。その意味では、ページ付けは重要な記述事項になります。

参考文献を記述する場合には、著者の姓ないしファミリー・ネームのアイウエオ順ないしアルファベット順で整理するので、少なくとも最初の著者については、姓ないしファミリーネームを最初に記述します。

他方、注の場合には、著者名はそのままの順序で記述します。

2. 3. 参考文献作成上の注意点⁶

参考文献を作成する際には、以下のことに注意しましょう。

- ① 参考文献表は、筆署名別の五十音順ないしはアルファベット順に統一します。氏を先行させ、氏が同一である場合は名前で順序をつけます。欧米語文献が多い時は、アルファベット順が便利です。同一著者の著書・論文は年代順にします。
- ② 全資料・文献を一括した「統一参考文献表」か、あるいは書籍・雑誌論文・新聞記

⁴ 河野(2004年)、85ページより筆者抜粋、編集。

⁵ 櫻井(2003年)、148ページより筆者抜粋、編集。

⁶ 河野(2004年)、85ページより筆者抜粋、編集。

事などの文献の種類ごとにまとめる「区分文献表」があり、どちらを採用しても構いません。ほかに、章ごとにまとめる方法などもあります。卒業論文程度までの長さなら、統一文献表が適当です。

- ③ 直接引用や要約の形で参照しなくても、何らかの形で参考にした書籍・論文は全て参考文献表に載せることが望ましいと言えます。
- ④ 出版事項のうち、出版地・出版社については、普通、参考文献の記述では丸括弧に入れません。
- ⑤ 洋書の場合には書名(および論文名)の普通名詞なども大文字にする場合が多くあります。
- ⑥ 和書では姓と書名の間、「、」、「、」を入れるものもあり、また洋書では姓名と書名との間をコンマではなくピリオドを使うものもあります。
- ⑦ 参考文献では、洋書の場合に著者が二人以上の時は、配列のために最初の著者だけをインバートしその後の名前はノーマル・オーダーで記述する場合と、全ての著者をインバートする場合があります。

最後の著者と手前の著者の間のコンマを省略する場合もあります。しかし、ラテン系の姓名の中には、名前自体の中に、「y」や「e」などの接続詞が入っている場合があります。したがって、そのような文献も、分けずに配列するのであれば、接続詞(英語の場合、「and」)の前のコンマは省略しないのが望ましいです。そうしなくては、&(アンパーサンド)を使用するとよいでしょう。

- ⑧ 注の場合にはコンマや丸括弧が使われますが、参考文献では各主要部分一著者名、書名、出版事項一の末をピリオドで結びます。

以下に参考文献の具体的な記述例を挙げますが、これはあくまでも事例にすぎず、どのようなルールによっても記述が統一されていれば構いません。

2. 4. 参考文献記述の基本的な形⁷

参考文献の記述に統一された基準はありませんが、強いて基本的なフォームを示せば、次のようになります。尚、参考文献の記述方法は、文献の使用言語、種類、形態によって異なるので、複数の場合に分けて示します。

⁷ 河野(2004)、148-158 ページより、筆者抜粋、編集。
白井・高橋(2008)、55-57 ページより、筆者抜粋、編集。

2. 4. 1. 和書の場合

○単行本

①著者『本タイトルー（または：）副タイトルー』（版表示）. 出版地：出版社，出版年.
または、

②著者.（出版年）.『本タイトルー（または：）副タイトルー』版表示. 出版地：出版社.

※以上の場合、コンマとピリオドを、日本語式の句読点にしても構いません。

例) 橋本進吉『国語音韻の研究』. 東京：岩波書店.

橋本進吉. (1950). 『国語音韻の研究』. 東京. 岩波書店.

橋本進吉(1950)『国語音韻の研究』東京、岩波書店、1950年。

福岡正夫『ゼミナール経済学入門』2版. 東京：日本経済新聞社，1994年.

福岡正夫. (1994). 『ゼミナール経済学入門』2版. 東京：日本経済新聞社.

福岡正夫『ゼミナール経済入門』2版、東京、日本経済新聞社、1994年。

なお、翻訳の場合には、書名の後ろに訳者名を入れます。

例) ダニエル・パッジオーニ『ヨーロッパの言語と国民』今井勉訳，筑摩書房，2006年.

○和雑誌・論文

著者「論文・記事名(または：)副タイトルー」『雑誌・新聞名』巻号数，(発行所名)，
刊行年(月)，掲載全ページ数.

例) 松岡洸司「日葡辞書の再考と新しい方向性」『日本語学：近代日本語研究』23巻，
12号，2004年9月臨時増刊号，222-230ページ.

田島宏「書評 フランス語大辞典—19・20世紀篇」『言語』8月号，大修館書店，
1972年，43-49ページ.

櫻井雅夫「アメリカの投資奨励保護協定(上・下)」『国際商事法務』30巻9，10
号，2002年9，10月，1208-12，1373-80ページ.

○アンソロジー所収

著者名「論文・記事名」『書名』編者名，[訳者名]，巻号数，発行所名，刊行年，掲載全ページ数。

例) 内位惣七「数学的論理学の成立」『現代哲学のバックボーン』神野慧一郎編，勁草書房，1991年，11-32 ページ。

※以上のように、参考文献表においては、雑誌論文やアンソロジー所収の論文は、その論文が掲載されている全ページを示します。

○ペーパーバック・シリーズ

例) 『千一夜物語』(豊島与志雄ほか訳) 東京：岩波書店，1983年：岩波文庫 赤版 780-1～781-2, 1988年。(アラビア語の原文から次のフランス語版使用：
Le Livre des mille nuits et une nuit, par le Dr. J. C. Mardrus)

○政府刊行物

例) 厚生労働省(2004). 『労働経済白書』(平成16年度版). ぎょうせい。

※ 政府刊行物の発行元は、政府自身が発行している場合は、省略出来ます(上の例では、厚生労働省が発行している場合です)。

○卒業論文

例) 山川花子(2008). 『卒業論文の書き方に関する研究』. 東京外国語大学外国語学部平成19年度卒業論文。

※ 卒業論文の発行年は、提出された年を書きます。

○インターネット、CD-ROM で入手した資料

例)

日本、外務省 『「大統領貿易促進権限(Trade Promotion Authority) について』(東京：外務省，2002年)，1-2 ページ。(2002年5月24日)
http://www.mofa.go.jp/mofa/area/usa/keizai/eco_tusho/tpa.html (アクセス日：2002年8月7日)

※ この場合、一番最後にアクセスした日を記しておきます。

2. 4. 2. 洋書の場合

ここでは、仏語と英語の文献の一般的な記述方法について取り上げます。(仏語文献の詳しい記述方法については、本章の項目 2.7 に、場合分けしたものを載せています。)

論文の書き方について書かれた一般的な参考書では、洋書の参考文献記述方法の例として、英語文献の書き方のみが取り上げられていることが殆どです。しかし、フランス語の文献の記述方法は、英語で書かれた文献のそれと全く同じではありません。実際に仏語の著作物に書かれている文献の表記を見て、一般的な記述方法を確認するのが望ましいです。

2. 4. 2. 1 フランス語の文献の記述方法に関する留意点⁸

①フランス語では、最初の語と固有名詞を除いては大文字を用いません。しかし、最初の語が冠詞の場合には、次に来る名詞は大文字にする場合もあります。また、例えば *Un Grand Espoir* のように、名詞の前に形容詞がある場合にはその形容詞も大文字にされることがあります。

②シリーズ物や雑誌の標題は英語と同様に、冠詞・前置詞・接続詞以外は大きく書かれます。

③単行本、雑誌、論文の書名には、イタリック体を用いることが一般的です。この場合、雑誌やアンソロジー所収の中の個別の論文・記事名には、イタリック体を用いません。

④標題として用いられている語の大文字の場合には、普通、アクセントをつけません。

⑤論文名は、括弧 « » で括弧をします。

⑥発行年は、括弧 « » の中に入れても入れなくても構いません。出版地と共に括弧 « » の中へ入れることもあります。また、発行年を入れる位置は、著者名の直後、或いは、文献情報の一番最後が一般的です。

例) MAURICE Baumont, *La Faillite de la paix* (Paris, 1951).

MAURICE Bardeche, *Qu'est-ce que le fascisme ?* (1961).

或いは、

Maurice Baumont, *La Faillite de la paix* (Paris, 1951).

Maurice Bardeche, *Qu'est-ce que le fascisme ?* (1961).

注) 以上のように、著者名の記述には「小文字」を使う場合と「スモールキャピタル」を使う場合があります。

⁸ 斉藤・西岡(2005)、133 ページより、筆者抜粋、編集。

2. 4. 2. 2. フランス語の文献の一般的な記述方法

○仏語の図書

著者名(刊行年), 題名 : 副題, 刊行地, 出版社

例) MARTINET, André (1965). *La linguistique synchronique*, Paris : P.U.F.

○仏語の雑誌

著者名(刊行年月). 論文(記事)の題名 : 副題, in (或いは dans) 雑誌の題名, 巻号, 出版社.

例) RAYMOND, Michel (1981). L'expression de l'espace dans l'œuvre de Colette in *Cahiers Colette* no 3-4, pp. 69-77.

2. 4. 2. 3. 英語の文献の一般的な記述方法

英語ではどちらかといえば大文字を多く使う傾向があります。文献名の最初に来る文字はもちろん大文字にしますが、他の語は、冠詞・前置詞・接続詞を除く単語は、その最初の一字を大文字で書きます。

例) Christopher Tunney, *A Biographical Dictionary of World War II* (London, 1972).

Jacques Godechot, *France and the Atlantic Revolution of the Eighteenth Century, 1770-1799* (London, 1965).

○英語の図書

著者 A, 著者 B, *and* 著者 C. (2009). 題名 : 副題. 刊行地 : 出版社, 出版年.
または、

著者 A(刊行年). 題名 : 副題. 刊行地 : 出版社.

例) WHORF, Benjamin Lee (1956) *Language, Thought and Reality: Selected Writings*. New York, Wiley.

○英語の雑誌

著者名(刊行年月). 論文(記事)の題名 : 副題, 雑誌の題名, 巻号, ページ.

または、

著者名. 主題 : 副題, 巻号, 刊行年月, ページ.

例) Whitsitt, S. (2005). 'A Critique of the Concept of Semantic Prosody', in
international Journal of Corpus Linguistics 10. 3. 283-305.

2. 5. 著者名の配列⁹

配列は、和書では著者名のアイウエオ順またはアルファベット順、洋書ではアルファベット順で行われるのが一般的です。和書と洋書とを分けずに混ぜて配列する時は、アルファベット順にするのが最もよいとされています。

配列の細かいルールは様々ですが、原則的には語(word)ではなく字(letter)の発音で追っていきます。

アルファベット順で配列する場合には、次のようになります。例えば、阿辺・安部(Abe)さんは、相澤・相沢(Aizawa)さんよりも、アルファベット順では前になります。

例)

<和書>	<発音>
阿辺一郎	アベ, イチロウ
安部和子	アベ, カズコ
安部友紀恵	アベ, ユキエ
相澤一好	アイザワ, カズヨシ
相沢啓一	アイザワ, ケイイチ
安藤信広	アンドウ, ノブヒロ
安東和喜子	アンドウ, ワキコ
荒井健二郎	アライ, ケンジロウ

メディア・センターや図書館では、和書のカタログリングの場合に姓と名との間に(,)を入れていますが、参考文献の目録を作成する際にはそうしません。

⁹ 櫻井(2003)、152-158 ページより、筆者抜粋、編集。

例)

<洋書>

Augustine, Saint
Becket, Thomas à
Braun, Wernher von
D'Annunzio
de Gaulle Charles
La Fontaine, Jean de
Linde, Otto zur
MacMillan, Donald Baxter
Ramée, Marie Louise de la
Saint-Beuve, Charles-Augustin
Sainte-Saëns, Charles-Camille

注) 上の例は、シカゴ・マニュアルによるものです。

この洋書の例で分かるように、ここではあくまで文献に記述された姓名を文字で追っています。したがって、「Mac」が「Mc」や「M」になっていたり、「Saint」や「Sainte」が「St」や「Ste」になっていたりすれば、綴りを戻さずにそのまま配列しています。もちろん、この略語を完全な綴りに直して配列することも自由です。しかし、この時は配列の上で完全な綴りと考えるということであって、著者名そのものを勝手に書き直してはいけません。

姓が複合の場合には、その最初の姓で配列します。ただし、複合姓を分割したり、分割しないで非複合の姓と混ぜたりする際には、その姓名の本人の用法、または定着している用法を優先させます。

例)

Ap Ellis, Augustine
Campbell-Bannerman, Henry
Castelnuovo-Tedesco, Mario
de Gaulle, Charles André Joseph Marie
La Révellière-Lépeaux, Louis-Marie de

姓名のインバージョンは安易に処理してはいけません。日本人が勝手にインバートして文献リストを作成しても、それは国際的に通用するものではなく、次代の利用者を混乱させるだけです。

例えば、シャルル・ドゴール(Charles André Joseph Marie de Gaulle) 大統領は、de Gaulle で「D」からインバートするのか「G」からインバートするのか、指揮者の ヘルベルト・フォン・カラヤン(Herbert von Karajan) は Karajan で、「K」からインバートするのか「v」からインバートするのか、というようなことです。

また、フランス、イタリア、スペイン、ポルトガル、ラテン・アメリカなどの国の姓名は、一般に、授かり名ないしクリスチャン・ネーム(2つ以上の場合もある)と父方の姓と母方の姓から成り、後者、すなわち父方と母方の2つが「y」、或いは、「e」でつながられている場合もあります。この場合には、父方の姓でインバートします。

どれが父方の姓か不明な場合には、本人や本人の出身地への問い合わせ、或いは、国立情報学研究所(NII)のデータベース・システム「NACSIS」の利用によれば、多少の事は即座に確認出来ます。

2. 6. 同一著者の文献を列挙する場合¹⁰

同一著者の文献を続ける場合には、まず、名前を五十音、或いはアルファベット順で並び、その後で、その同一著者による文献を、発行年順に並べます。

2. 6. 1. 同じ名前で同じ発行年の場合

同じ名前で同じ発行年の場合には、書名や論文題目のアルファベット順で並べます。そして、年号の後に、順に、a, b, c, ...と、記号をつけておきます。

例) 金田一春彦(1978a). 『ことばの魔術』. 東京：講談社.

金田一春彦(1978b). 『ことばの由来』. 東京：講談社.

Nølk, H. (2006a), « Pour une théorie linguistique de la polyphonie: problèmes, avantages, perspectives », L. Perrin(éd.) *Le sens et ses voix. Dialogisme et polyphonie en langue et en discours*, Recherches linguistiques, 28, pp. 215-241.

Nølk, H. (2006b), « Connecteurs pragmatiques. Apport de quelques connecteurs à la structure polyphonique », *Le français moderne*, 1, pp. 32-43.

¹⁰ 櫻井(2003)、158-161 ページより、筆者抜粋、編集。
白井・高橋(2008)、56-57 ページより、筆者抜粋、編集。

なお、同一著者で同一年の文献一つしか引用しないときは、a, b は不要です。あくまでも該当の論文の引用文献の中で使う便宜的な記号だからです。このため、論文によって、a, b という記号がついたり、つかなかったりします。

2. 6. 2. 著者が複数の場合

著者が複数の場合は、単独の場合の続きに書きます。具体例を次に示します。

例) 柴田武(1984). 『奄美大島のことば：分布から歴史へ』. 武蔵野：秋山書店.

柴田武・石毛直道(1983). 『食のことば』. 東京：ドメス出版.

柴田武・北村甫・金田一春彦(1980). 『音韻』. 東京：大修館書店.

上の例では、「柴田武・石毛直道」「北村甫・金田一春彦」は、どちらも第1著者である「柴田武」の前に来ています。次に、複数の著者による文献の並べ方について説明しますが、これについては、第2著者のアルファベットで決めます。石毛直道(Ishige) のIは、北村甫(Kitamura) のKよりも前なので、その順序にしたがって書きます。この場合には、2番目に挙げる文献の著者の数は2人(柴田・石毛)、3番目に挙げる文献の著者の数は3人(北村・金田一)となり、偶然にも、先に挙げる文献から最後に挙げる文献に行くにつれて著者の数が増えて行きます。しかし、著者の人数によって文献を並び替える必要はありません。次の例を見てください。

例) 湯川秀樹(1981). 『創造への飛躍』. 講談社

湯川秀樹・坂田昌一・武谷三男(1970). 『現代学問論』…(以下略)

湯川秀樹・朝永振一郎(1981). 『湯川・朝永宣言』…(以下略)

この場合、第2著者のアルファベットにしたがって著作を配列すると、2列目に挙げる文献の著者数は3人(湯川・坂田・武谷)、3列目に挙げる文献の著者数は2人(湯川・朝永)になっています。2列目の文献の著者数の方が、3列目の文献の著者数より多くなっていますが、この方法で書いて構いません。

2. 6. 3. 著者名を省略する場合

同一著者による文献が続く場合、最初の文献には姓名を記述し、次からは著者名に代えて、和書の際は「同」または下線(____)または棒線(——)を、洋書の際は下線または棒線を記述します。配列は、文献の出版年順または著者名のアルファベット順で行う事が多いです。また、書名の先頭の冠詞、前置詞、接続詞などを無視して配列することもあります。

○和書の場合

<出版年順に配列したとき>

例) 橋本進吉『国語学概論』東京：岩波書店：1946年.

同『国語音韻の研究』東京：岩波書店，1950年.

同『国文法體系論』東京：岩波書店，1959年.

もしくは、

橋本進吉『国語学概論』東京：岩波書店：1946年.

——『国語音韻の研究』東京：岩波書店，1950年.

——『国文法體系論』東京：岩波書店，1959年.

○洋書の場合

洋書の場合には、省略する著者名の部分にダッシュ(——)を入れます。ここでは、例として、仏語文献のみを取り上げます。

例) KIRTCHUK, P., 1993. *Pronoms, Deixis, Accords, Classification : Morphogenèse et Fonctionnement. Essai illustré notamment de données en Pilagá, Gran-Chaco, Argentine.* Thèse soutenue à l'Université Paris VI-Sorbonne. Dir.: B. Pottier.

——, 1994. « *Deixis, anaphore, 'pronoms': morphogenèse et fonctionnement* ». *Les Classes de mots.* L. Basset et M. Pérennec (éds.). Presses Universitaires de Lyon.

——, 2005. « *Thématisation ? Dislocation ? Réfutation de l'approche reçue* ». *Linguistique typologique, Études rassemblées par G. Lazard & C. Moyse-Faurie*, 109-122. Villeneuve d'Ascq, Presses Universitaires du Septentrion.

著者が編集した図書または著者が他の者の協力を得て執筆した図書は著者だけで執筆した図書と一緒に配列してはならず、①著者一人による図書(単行書)、②著者の編集書、③著者を含む共著、④著者の翻訳書、⑤著者の編纂書の順で配列します。共著の場合には、当該著者の名前には繰り返す代わりに下線(____)または棒線(——)を使うことも出来ます。

2. 7. 仏語文献の記述サンプル¹¹

記述方式統一の基本的目的は、だれもが資料情報にアクセス出来るようにさせることです。ここに示した記述方法は、ひとつの型に過ぎません。よって、別の基本型で統一出来るのであれば、ここに例示したものにこだわる必要はありません。

○単著(図書)

DUCROT, O. (1984), *Le dire et le dit*, Paris, Editions de Minuit.

CHARAUDEAU P. (1992). *Grammaire du sens et de l'expression*. Paris : Hachette.

○2人の共著(図書)

ANSCOMBRE, J-C., & DUCROT, O. (1983), *L'argumentation dans la langue*,

TROGNON A. et LARRUE J., 1994, *Pragmatique du discours politique*, Paris, Armand Colin.

○3人の共著(図書)

NØLK, H., FLØTTUM, K. & NORÉN, C (2004), ScaPoLine. *La théorie scandinave de la polyphonie linguistique*, Paris, Kimé.

RIEGEL M., PELLAT J.-C. et RIOUL R., 1999, *Grammaire méthodique du français*, Paris, PUF.

○4人以上の共著(図書)

ROSSARI, C., BEAULIEU-MASSON A., COJOCARIU C. & RAZGOULIAEVA A., 2004 : *Autour des connecteurs. Réflexions sur l'énonciation et la portée*, Peter Lang.

ROULET E., AUCHLIN A., MOESCHLER J., RUBATTEL C. et SCHELLING M., 1991, *L'articulation du discours en français contemporain*, Berne, Peter Lang.

¹¹ ここでの文献の分類は、櫻井(2003)、163-190 ページを参考にしました。

多くの著者がいる場合、最初の一人の名前だけを通常の順番のフルネームで記述し、その語に « et al. » をつけて、著者名すべてを記述するのを省略することがあります。

例) ROULET E., et al.(1991), *L'articulation du discours en français contemporain*,(以下省略)

○著者に相当する編者または編纂者

DIDEROT, D. Et J. D'ALEMBERT, *Encyclopédie, ou Dictionnaire Raisonné des Sciences, des arts et des Métiers*, Paris – Neuchâtel, Briansson, David, Le Breton, Durand Faulche, 1751-1777.

Trésor de la Langue Française. Dictionnaire de la langue du XIX^{ème} et du XX^{ème} (1971-1994), P. Imbs puis B. Quemada (dir.), Paris, CNRS INALF, Klincksiek puis Gallimard.

REY, A., (1992), *Dictionnaire Historique de la Langue Française*, Paris, Dictionnaires Le Robert.

○別の著者により翻訳された著書

ARISTOTE, *Œuvres complètes*, trad. fr. Barthélemy de Saint-Hilaire, Paris, 1870.

—*Organon*, trad. fr. Jean Tricot, Paris, Vrin, 1989.

BERMON Emmanuel, *La signification de l'enseignement*. Texte latin, traduction française et commentaire du *De magistro* de saint Augustin. Paris, Vrin, 2007.

LÉONARD Bloomfield, *Le langage*, traduit de l'américain par Janick Gazio. Paris, Payot, 1970.(Bibliothèque scientifique)

○翻訳版の記述

Jakobson, Roman, *Essais de linguistique générale*, traduit de l'anglais et préfacé par Nicolas Ruwet. Paris, Minuit, 1963.

Chomsky, Noam, *le langage et la pensée*, traduit de l'américain par Louis-Jean Calvet. Paris, Payot, 1970.(Petite bibliothèque Payot, 148)

Obama Barack, *Dreams from My Father : A Story of Race and Inheritance*, New York, Three Rivers Press, 1995 et 2004, trad. fr. *Les Rêves de mon père*, Paris, Presse de la Cité, 2008.

○学術雑誌・専門誌

- MALMBERG, B.(1971), *Phonétique générale et romane, étude en allemand, anglais, espagnol et français*. Paris, Mouton. (Janua lingarum, series major, 42)
- GOUGENHEIM G.,(1938), '*Celui et Ce aux points de vue syntaxique et fonctionnel*', Bulletin de la société française de Paris, Tome 60, fascicule 1, pp.88-96.
- BUGEAU, D. (1971)., « Étymologies française : I QUAIS ; 2. ARLEQUIN », dans *Revue roumaine de linguistique*, Vol. 16, Bucarest, pp. 53-62. »

○新聞記事・雑誌記事

- Le Monde*, 28 février 2009, p. 5.
- Philippe Chalmin, *Le Monde Économie*, 10 mars 2009, p. 3.
- The Economist*, « How China Runs the World Economy », 30 juillet-5 août 2005, pp. 65-67.

○年鑑など

- Annales des économies, sociétés, civilisation*. Paris, Colin. 23^e année N° 6(1968)—25^e année N° 6(1970).
- Annuaire de l'instruction publique en Suisse*, publié par François Guex, Jules Savary, Ernest Savary, Louis Jaccard. Lausanne, Payot. 2^e année(1911)—10^e année(1919).

○複数の巻数のある著作のうちの一冊

- BRUNOT F., *Histoire de la langue française des origines à nos jours*, t. I . Paris, A. Colin, 1966.

○シリーズ(双書)の中の著書

- GADET, F., *Le français populaire*, « Que-sais-je ? » 1172, Paris, PUF, 1997.
- FRANÇAIS J., *Pour une cartographie de la polysémie verbale*. Leuven-Paris, Peeters (Coll. ling. publiée par la Société de Linguistique de Paris, XCII), 2007.
- PROUST M., *Du côté de chez Swann*(1913), Paris, Gallimard, coll, Folio, 1986.

○学位論文

HAMMA B. (2005), *L'invariant sémantique de la préposition PAR à travers les distributions syntaxiques et lexicales*, Thèse de doctorat, Université Paris X–Nanterre.

FEGARD B.(2006), *Évolution sémantique des prépositions dans les langues romanes : phénomènes de grammaticalisation*, Thèse de doctorat, Université Paris VII.

○学会発表、討論会に使用された文献

Gamier C.(2007), « L'adverbe *tout* en construction comparative : *tout* prémodifieur de *aussi* », 17^{èmes} rencontres linguistiques en pay rhénan, Strasbourg, 11-12 octobre 2007.

Péroz, P. (2007), « *C'est ben toi ça !* Dense, discret, compact : modalités régulières de la variation sémantique », communication présentée au colloque : « Construction d'identité et processus d'identification », Université François Rabelais, Tours (29 et 30 novembre 2007).

○和書の参考文献を、仏語訳で記述する場合

例えば、日本語で書かれた次の書評を仏語で記述することにします。

田島宏「書評 フランス語大辞典—19・20世紀篇」『言語』8月号, 大修館書店, 1972年, 43-49ページ.

この場合には、まず、自分で日本語の文献の書誌情報全てをフランス語へ翻訳します。その後、和書のローマ字表記、日本語表記と併せて、以下のようにまとめて記述します。

Hiroshi TAJIMA 田島宏, *Shohyō Furansugo Daijiten—19・20 Seiki hen*「書評 フランス語大辞典—19・20世紀篇」(*Critique de livres : Grands dictionnaires français des XIX et XX siècles*), dans *Gengo* 『言語』8月号(*Langues*) numéro d'août, Tokyo 東京, Taishūkan 大修館書店, 1972, pp.43-49.

○インターネット、CD-ROM で入手した資料

ATLF, *Trésor de la Langue Française* informatisé, texte intégral sur Cédérom, CNRS éd.

BLOCH, O. et WARTBURG v., W., (1932/2002), *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Paris, PUF.

http://marges.linguistiques.free.fr/theses/theses_resu/romero_c.htm

FRANTEXT, <http://www.atilf.fr/>

Indiana University, Departement of French & Italian :

<http://www.indiana.edu/~frithome/>

LINDQVIST, C., (2001), *Corpus transcrit de quelques journaux télévisés français*, Uppsala, Uppsala University.

参考文献

京都外国語大学附属図書館編『フランス語図書目録』、京都外国語大学附属図書館 1972-1978 年。

齊藤孝、西岡達裕『学術論文の技法』新訂版、日本エディタースクール出版、2005 年。

櫻井雅夫『レポート・論文の書き方 上級』改訂版、慶応義塾大学出版会、2003 年。

白井利明、高橋一郎『よくわかる卒論の書き方』ミネルヴァ書房、2008 年。

東京外国語大学欧米第二課程フランス語研究室フランス研究会『ふらんぼー』、第 34 号、2009 年。

Bulletin de la société de linguistique de Paris(2008), Peeters Paris-Louvain, tome 103 : 2.

Jean-Marie klinkenberg(2009), *Le français moderne : Revue de linguistique française*, Conseil international de la langue française, numéro 2.

Pierre Nora, *le débat* (2009), numéro 155.

Walter De Mulder & Dejan Stosic(2009), *Language : Approchés récentes de la préposition*, Larousse, 173.

3. 論文を書いてみよう

3.1 論文とは何か？¹²

論文とは、エッセイや小説のような自由な文章表現ではなく、一定の形式を備えた文章表現のことを指します。したがってどんなに内容が優れていても、この形式を踏まえていなければ論文ではありません。論文と呼ぶことができるのは、私たちが研究する分野で言うと、ある言語現象や文学作品といった対象に対して、「問い」かけをして、方法に従ってアプローチしながら「答え」を出すという形式でできているものと言えるでしょう。論文の特徴は次の3つにまとめられます。

①論文はコミュニケーションの一つでもあります。つまり、複数の人に読まれる可能性があることを考慮に入れた、公共性を持った文章です。論文は、演説や口頭発表のような口述表現ではありません。文章表現である日記や手紙とも、この公共性の点において異なっているのです。したがって、主観性を示す表現「○○○○は好きではない。」というような書き方は論文には適していません。代わりに「○○○○には問題点がある。」というのが論文に使われる文章となります。また手紙のように公共性を持たない場合、誰かの文章を無断で利用することは問題にはなりません。しかし論文において許されることではありません。それは著作権の観点から見て、盗用となってしまいます。論文中の文章が作品からの引用なのか、例文なのか、それとも作品の解説からの引用なのか、あるいは自分の考えなのかを常に明確にしましょう。

②論文において、執筆者はあるテーマのもとで問題を立て（「序論」）、それについて論理的・実証的に論を展開し（「本論」）、最終的に問題について解答（「結論」）を与えるという段階を踏むのが一般的です。つまり論文は基本的に、「問い」から始まり、「議論」を経て、「解答」に至る「序論—本論—結論」という形式で構成されています。したがってこの「問い—答え」という形式をもたない文章表現を論文と読むことはできません。例えば、感想文のように、自分の感想を書くだけでそれを実証する必要はない文章は論文とは言えません。同様に、事実のだけを列挙する報告書もこの「問—答」形式を持たないので、厳密な意味で論文ではありません。

③論文の目的は、論理的・実証的論述によって、読者に対して自分の結論的主張を説得し、

¹² 河野(1997)pp.32-33 を参考にした。

納得させることなのです。この論文での説得は、論理と実証によって行わなくてはなりません。したがって論文では、文体的な美しさは要求されませんが、読者に分かりやすく、論理的にかつ実証的に十分説得力があるかどうか重要なポイントとなってきます。

3.2 論文執筆のためのスケジュール¹³

- | | |
|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第1段階 | 論文作成の基礎整備 |
| | ・興味関心を持っている事柄について、整理してみる。
・文献・雑誌などを読み、基礎知識、情報を確認する。 |
| 第2段階 | テーマを明確化する |
| | ・問題意識を持ったテーマに焦点を絞る。
・テーマに関わる知識を習得、情報・資料を収集する。 |
| 第3段階 | テーマについての検討 |
| | 仮説の設定 方法・手法の確定 論証の開始 |
| | ・テーマについての専門的な文献を読み、具体化し、テーマに沿った仮説を設ける。
・自分の設定したテーマにどのようにアプローチするか、その手法、分析の立場を決定するために、先行文献を参考にしながら、どんな方法があり、自分がどう工夫して論証するかを試行錯誤する。
・他者の分析の結論をよく理解し、自分が主張し、論証しようと考えていることの、学問分野における位置づけ、意味を明確にする。 |
| 第4段階 | 論証・結論 |
| | ・設定した問題に適した方法を当てはめ、分析、検討をしながら自身の仮説を論証し、下書き原稿を作成する。
・分析、論証の進展に合わせて必要によっては補足資料の収集、補足調査をする・ |
| 第5段階 | 卒論の作成と完成 |

¹³ 早稲田大学出版部(2000)pp.16-22 を参考にした。

- ・下書き原稿をもとに、表現や形式に注意しながら原稿作成にあたる。
- ・注、図表、参考文献など本分以外の細部にも注意して作業を進める。

3.3 テーマの設定¹⁴

テーマは研究の問いに適したものでなければなりません。そのためには、次のような条件をきちんと満たしているかを書き始める前にチェックしてみましょう。

- ①テーマは実証できるか。
- ②必要な資料等が入手可能か。
- ③答えがすでに出ていないか。
- ④テーマが大きすぎないか。
- ⑤テーマが抽象的すぎないか。
- ⑥テーマが流動的でないか。
- ⑦予測可能であるか。

どんなに興味を引くテーマであっても、これらの条件が満たされなければ、研究は困難になるかあるいは不可能になってしまいます。テーマには、文献や観察や実験などによって客観的に調査、分析し、何らかの結論が出せるようなある特定の問題を設定すべきです。つまり客観的に論じることのできるテーマを選ぶ必要があるのです。

テーマの設定に困ったときに参考になるのは、先輩方の研究レポートや論文です。先行研究を読むことで、テーマだけでなく、文献の探し方、形式、文章の書き方、立証の仕方、引用の仕方、参考文献など多くの点においてヒントを与えてくれるでしょう。

¹⁴ 吉田(1997)p29 を参考にした。

3.4 論文の構成と体裁

3.4.1. 本文の構成部分

論文は、基本的に「序論・本論・結論」によって構成されています。この「序論・本論・結論」の3つを合わせて「本文」と呼びます。

参考までに各部分の分量はおおよそ、

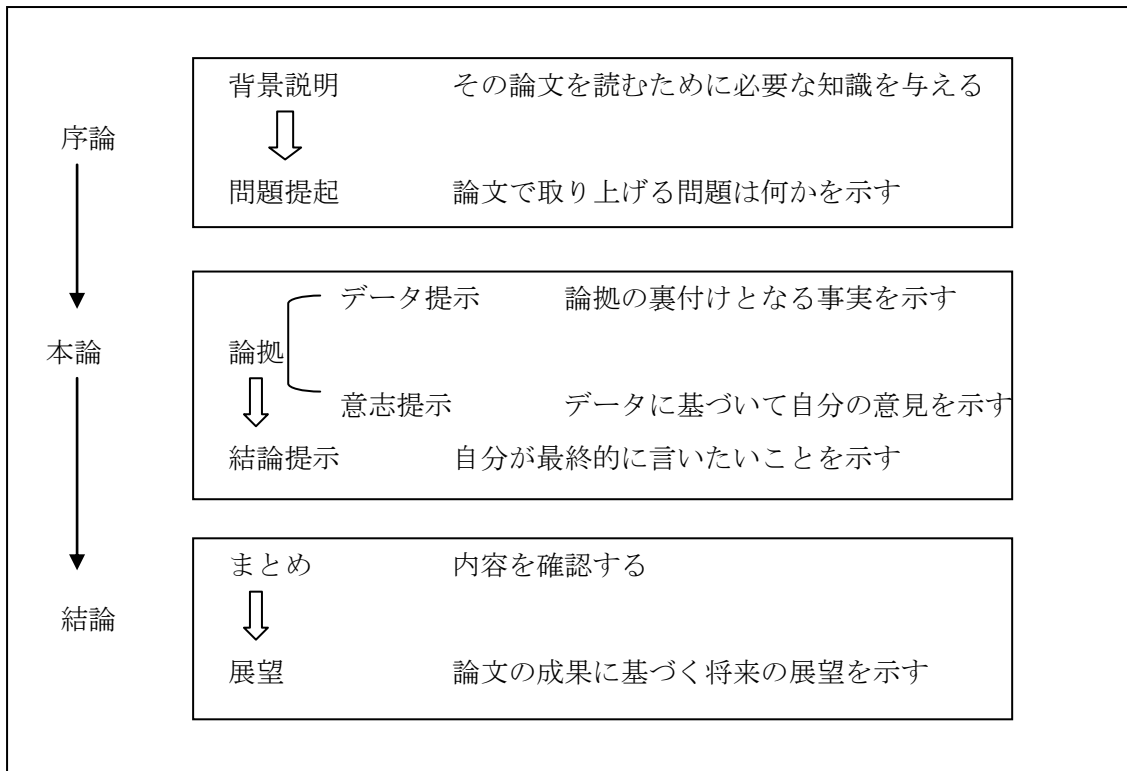
「序論」：5～10%

「本論」：80%

「結論」：10%

が目安となっていますが、論文の目的によって多少増減してもかまいません。論文ではさらに「本文」に加えて「表題」、「目次」と「参考文献一覧」、「要旨」を付ける必要があります。

本文の基本的な構成



3. 4. 2. 構成順序と体裁¹⁵

論文全体の基本的な構成は以下の通りです。

①前付け

表題、目次（必要に応じて図表・要旨）

②本文

序論、いくつかの章や節で構成する本論、結論（必要に応じて図表・脚注）

③後付け

参考文献一覧、付録・補足資料（必要に応じて略語や用語の解説）、和文・欧文
要旨

枚数は前付け、本文、後付けを含めて、

卒業論文がA4で50枚、修士論文がA4で80枚程度とされていますが、詳細については教務課・履修案内で必ず確認しましょう。提出資格、題目届、作成要領、要旨、提出部数・期限や評価基準まで記されています。

例①前付け 日本語横書きの場合

・表題

平成21年度 卒業論文
〇〇〇〇におけるフランス語の特徴
東京外国語大学 欧米第二課程フランス語専攻 学籍番号 氏名

フォント MS明朝体

平成〇〇年度 〇〇論文または〇〇研究

文字サイズ 18~20ポイント

題目の文字サイズ 28ポイント

所属・氏名の文字サイズ 18~20ポイント

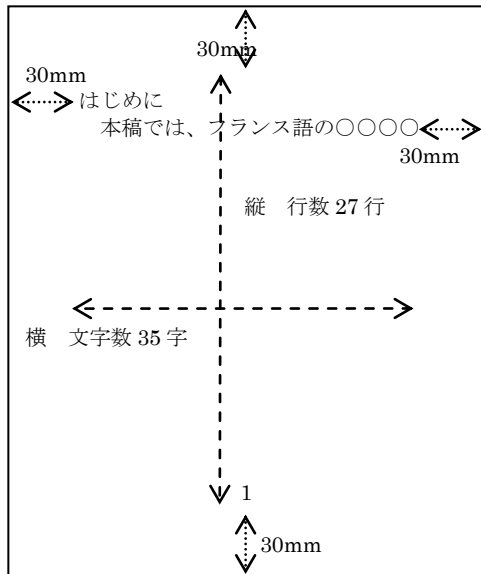
¹⁵ 河野(1997)pp.32-33を参考にした。

・目次

目次は論文の章立てとも深くかかわっています。章立ては構成項目ごとにするともとまりがよくなります。内容に従って論理的に章立てをする、極端な細分化はしないで読み手に分かりやすくすることを心がけましょう。必要に応じて、図表、脚注のリスト、付録・補足資料もつけましょう。

目次		ページ数も記入
序章	・・・・・・・・・・	1
1.〇〇〇〇とは		
1.1.日本での研究	・・・・・・・・・・	2
1.1.1.〇〇〇〇のとらえ方	・・・・・・・・・・	4
1.1.2.〇〇〇〇学派の解釈	・・・・・・・・・・	5
1.2.フランスでの研究	・・・・・・・・・・	7
1.3.〇〇〇〇の問題点	・・・・・・・・・・	9
2.	・・・・・・・・・・	〇
2.1.	・・・・・・・・・・	〇
2.2.	・・・・・・・・・・	〇
2.3.1.	・・・・・・・・・・	〇
2.3.2.	・・・・・・・・・・	〇
2.4.	・・・・・・・・・・	〇
3.	次のようにしてもよい。	
3.1.	第3章 〇〇〇〇のプロトタイプ	
3.2.	第1節 〇〇〇〇の再検討	
	第2節 〇〇〇〇プロトタイプ	
結論	・・・・・・・・・・	〇
参考文献一覧	・・・・・・・・・・	〇
付録・補足資料 (必要に応じて)	・・・・・・・・・・	〇
和文要旨	・・・・・・・・・・	〇
欧文要旨	・・・・・・・・・・	〇
序章で	研究のきっかけ・ねらい	
	研究の構成	
本論で		
	研究対象の背景と動向	
研究成果	アプローチ	
	結果の詳細	
論の展開に合わせて章立てをする。		
結論で	研究結果のまとめ	
	今後の課題	
要旨	和文・欧文ともに	
	A4で1枚程度	

例②本文 日本語横書きの場合



フォント MS明朝体

文字サイズ 10.5ポイント程度

マージン（余白） 上下左右ともに 30mm

1行字数・1ページ行数は 35字×27行を目安

3. 5. 引用の仕方

論文を作成する際に、原典や参考文献からの引用を交えて論を展開することはよくあることですが、その際に論文中のどの部分が引用部分で、どこからが自分の意見であるのかを明らかに示さなくてはなりません。そのために、原典や他の文献を引用する際に使う記号には決まりがあります。

① 「」 長くない日本語の引用や、論文・作品のタイトルに用いる。

② 『』 引用中の引用や括弧付きの文、書籍・雑誌・作品のタイトルに用いる。

③ 《》 長くない欧文の引用や欧文の論文のタイトルに用いる。

④ […] 省略あり。引用文が長くなるのを避けるために用いる。

⑤ …… 中断・省略・間などに用いる。

⑥ ママ 引用文は出典から正確に引用する。万が一、原文に誤字（誤字と思われるもの）があるような場合にも原文をそのまま引用し、ルビのように該当文字の上にふる。

⑦ sic ラテン語で「原文のまま」を意味するママの欧文版。

⑧ —— 会話文の冒頭や挿入句などに用いる。

参考文献

河野哲也（1997）『レポート・論文の書き方入門 改訂版』慶應義塾大学出版会

吉田健正（1997）『大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方』株式会社ナカニシヤ出版

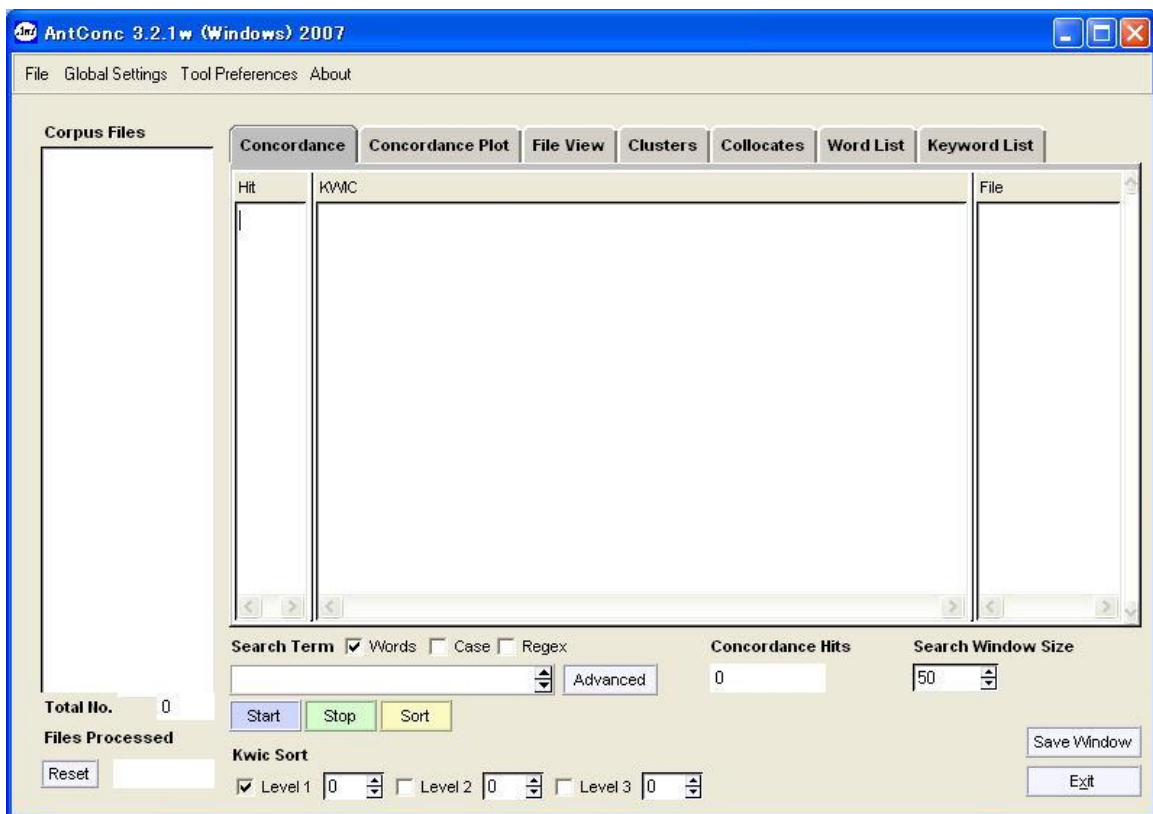
早稲田大学出版部(2000)『卒論・ゼミ論の書き方』

4. 分析ツール

ここでは言語分析に役に立つ2つのツール AntConc と Praat をごく簡単に紹介します。

4. 1. AntConc

AntConc は早稲田大学の Laurence ANTHONY 氏が開発したテキスト分析ツールです。ソフトウェアは <http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/> に公開されており、誰でも自由にダウンロードすることができます。このソフトウェアを利用するとテキスト内の単語や形態の頻度情報、出現する場所、前後の文脈などを詳細に調査することができます。



このソフトについては神戸大学の石川慎一郎氏が詳細な利用手引を作成していますので、詳しいことは <http://www11.ocn.ne.jp/~iskwshin/antconc.html> を参照してください。

4. 2. Praat

Praat はアムステルダム大学の Paul BOERSMA 氏と David WEENINK 氏によって開発されたオープンソースの音声分析のためのソフトウェアです。このソフトウェアのマニュアルは英語で公開されています（http://www.philhist.uni-augsburg.de/lehrstuehle/anglistik/applied/bilder/Praat_Manual1.pdf や <http://person2.sol.lu.se/SidneyWood/praate/frames.html>）。日本語では <http://utsakr.hp.infoseek.co.jp/praat/> があります。ダウンロードについては http://www.geocities.jp/kotobano_hatake/research/use_praat.html 等を参照しましょう。

